

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1. 位置と地理的・歴史的環境

#### A 位置と地理的環境（第1・2・3図）

佐渡島は、本州、北海道、九州、四国、沖縄を除くと、日本最大の島で、面積約857km<sup>2</sup>、周囲227kmの広さである。中央の国中平野を挟んで北に大佐渡、南に小佐渡と分かれる。大佐渡山地には標高1,173mの金北山をはじめとして1,000m近い比較的高い山並みが連続し、小佐渡丘陵は標高645mの大地山を最高として比較的低い山並みとなっている。佐渡島で確認される最古の岩石は今からおよそ2～3億年前の古生代後期のものであるが、佐渡島の大部分は火山によってできた火山岩類および日本海の海底で堆積した地層が重なったものである。火山活動は約2,000万年前で、それによって入川層、相川層、真更川層、金北山層が形成された。この火山活動によって、安山岩、流紋岩の溶岩や軽石、火山灰が多量に噴出したが、佐渡鉱山等の金銀鉱床は、この火山活動に関係してできたとされる。他の岩石としては、凝灰岩、玄武岩、硬質頁岩などがある。日本海が誕生するのは今からおよそ1,700万年前である。この時に堆積していったのが下戸層、鶴子層、中山層である。これらの地層が隆起運動で変形しながら海上に現れ、佐渡島が誕生した。佐渡島が現在とほぼ同じ形になったのは今からおよそ数十万年前とされている。第四紀の中頃になると隆起運動が活発となり、高い山地が形成され、それと氷期・間氷期の繰り返しによる海面の上下運動が重なり段丘地形が作られていった。現在5段の段丘面が確認されている。国中平野は中央部が沖積層であるが、周りには中位段丘、低位段丘がよく発達している。加茂湖はこの中位段丘によって囲まれている。平野西側の真野湾にそって八幡砂丘が発達している。[新潟県教委2000]

大佐渡山脈の西側の海沿いは外海府と呼ばれる。金北山を主峰に険しい山々が海岸近くまで迫っている。これらの山々から海へと流れ出る主な河川は38本を数える。

地形は、ほとんどが台地と急斜面となっており（第1・2図）。砂浜の少ない切り立った岩盤からなる海岸線は、国の記念物（名勝）に指定されている。佐渡島は現在も隆起を続け、隆起量は佐渡地域が大きい。集落は、海岸沿いの海成段丘面上や、流出河川によってわずかに形成された扇状地上に立地し、耕作地は主に、集落背後の海成段丘面上に広がっている。集落背後の海成段丘面は、流出河川によって深く挟まれて独立し、舌状台地の形を呈して、集落の背後に迫っている。これらの舌状台地から始まる尾根の上を、南東へ進めば、大佐渡山脈の主稜線を越えて、国中平野へと向かうことができる。

流出河川によって侵食が進んでいき、潟湖が平野化した様子が、佐渡市石花では考古学的に裏付けられている。[相川町教委1983]

相川湾の入江も、そうした侵食による堆積はある程度進んでいたであろうが、大部分は江戸時代以降の埋め立てである。[佐藤俊策1994]

相川湾より南は二見半島と呼ばれ、外海府地域とは区別されている。第四紀の中頃に活発化した隆起運動の大きい区域にあたり、段丘地形がよく発達している。[小林、神蔵1993] 大佐渡山脈の南端にあることから、集落背後の山は緩やかである。灌漑設備が整ってから、集落背後の内陸深くまで耕作地が広がっている。ここの地形もほとんどが、台地と急斜面からなっており、集落は海岸沿いの海成段丘面に立地している。流出河川による侵食は、外海府地域ほど大きくない。

佐渡金山遺跡（第1図-25）は、道遊割戸・父の割戸・大立坑・青盤間歩等を擁する鉱床地域から北沢（濁川）沿いに扇状に広がり、水金沢と間切川（南沢）によって隔てられた2つの尾根の先端部近くまで

が、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。(第2・3図)

2つの尾根うち、南側の尾根(濁川と間切川によってつくられた尾根で、上町台地と呼ばれる)(第2図)は、初期・前期の相川と重なる部分が多い。

例えば(株)ゴールデン佐渡が経営する「佐渡金山」の第3駐車場は、鉾山集落の跡地である。また初期の鉾山集落である「上相川」の一部も、佐渡金山遺跡に含まれる(第3図)。

さらに尾根をさかのぼれば、青野峠を経て鶴子銀山の鉾床地帯へとつながる(第1図)。その尾根の先端部には、佐渡奉行所跡が立地する(第2・3図)。

佐渡奉行所跡は、西側の眼下に相川の町並みを見下ろす場所に建てられたことがわかる。相川の市街地は、海岸に沿って南北に伸びる下町と、前述の緩い傾斜を持った段丘上を東西に伸びる上町(かみまち)からなり、T字状を呈する。上町と下町の間は、勾配の急な段丘斜面によって隔てられている。そのため、上町と下町は、石段のあるいくつかの坂道で結ばれている(第2・3図)。

## B 相川地区の遺跡(第1図)

佐渡島では、旧石器時代の遺物が単独資料では見られるが、追加資料の出現が待たれている状況である。[堅木1998] 相川地区では、旧石器時代のものと言える資料は、採集されていない。

縄文時代にはいると、縄文早期の資料が南佐渡に主に見られる。縄文中期には、遺跡が全島で見られるようになる。国中平野では、海水湾入部の台地先端に集中して遺跡が分布するが、相川地区のある大佐渡山系西側の海成段丘面には、面積の狭小な石器・土器の散布地や海食洞穴が分布する。事例の増加を待たなければならないが、定住的な遺構を明確に伴わない遺跡が、分布すると言える。[佐藤俊策1993]

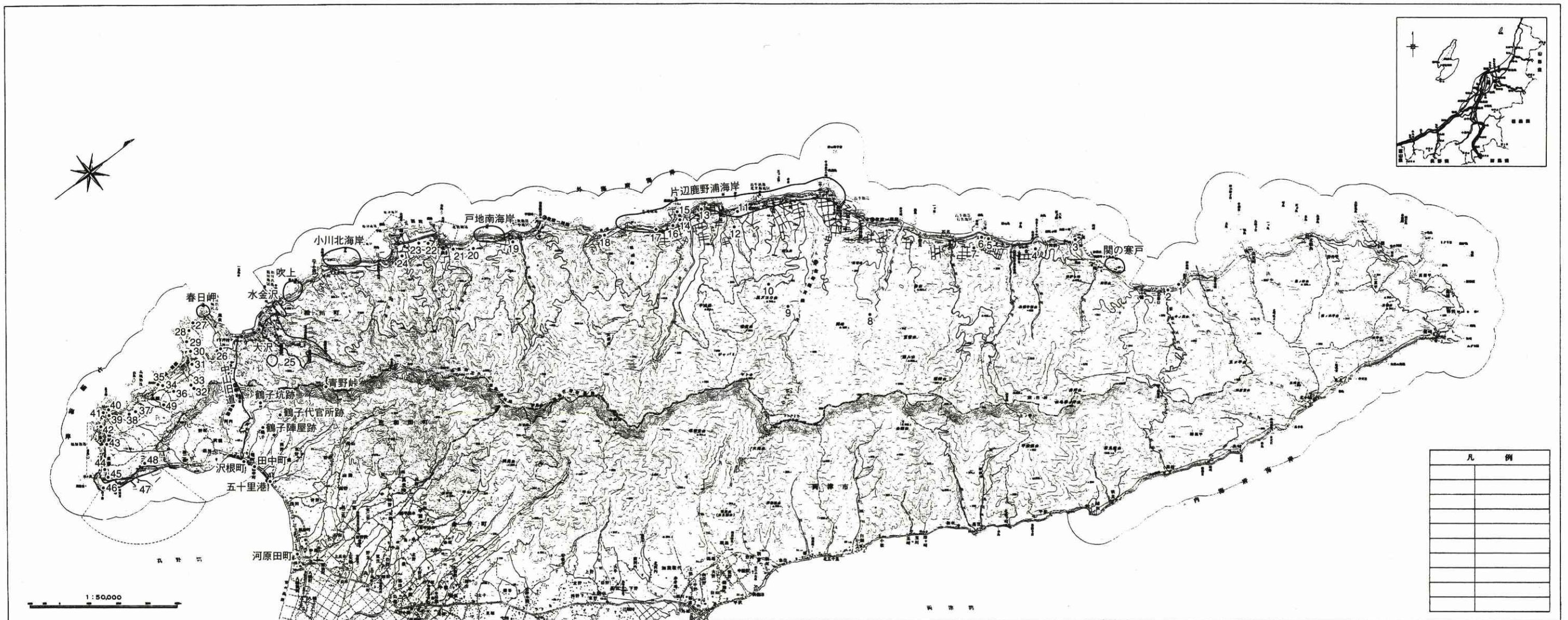
弥生時代の遺跡では、中期以降のものが確認されている。それらは、弥生時代中期以降の国中平野での、半専門的な稲作を裏付ける遺跡とは異なり、面積の狭小な土器散布地や海岸沿いの土器散布地である。[新潟県考古学会1999] 本格的に調査された佐渡市高瀬の夫婦岩・浜端洞穴遺跡(第1図-34・35)では、弥生中期の北陸系・東北系の土器が共伴し、管玉製作時に出土した剥片と思われる緑色凝灰岩片、ト骨片、天王山式土器が出土した。[相川郷土博物館1969]

佐渡島では、今のところ、前期古墳は発見されていない。しかし、佐渡市相川鹿伏出土と伝えられる宮内庁所蔵資料には、碧玉製車輪石・金環・ガラス製小玉など24点があり、前期古墳の存在が窺える。古墳時代後期には、海岸沿いの土器散布地とともに、6世紀頃の北九州系と見られる石室をもつ台ヶ鼻古墳、6世紀後半以降築造のものでは二見半島の西半に8つの円墳が、これまでに確認されている(第1図-27・28・29・30・40・41・42・46)。[相川郷土博物館1964 新潟県考古学会1999] いずれも、海成段丘端の海岸を見下ろす位置に、築造されている。これらの古墳では、佐渡市橘の橘古墳が、1960(昭和35)年に調査された。古墳は盗掘されていたが、横穴式石室から壮年男子2体以上の人骨、碧玉製管玉・ガラス製切子玉・滑石製白玉・直刀・鉄鏃・鏢・鎌・鍬・土師器が出土した。[相川郷土博物館1961]

外海府地区では、同時期の古墳は確認されていないが、二見半島での遺跡分布が示すように、海における生業を前提にした生活に不都合があったとは考えられず、事実、弥生～古墳時代の土器片は採集されている。[金沢他1964]

奈良・平安時代には、海岸沿いに広範に、製塩土器が散布する地点が確認されるようになる。二見半島では、8世紀前半に、須恵器生産が開始され(第1図-32・36・49)、9世紀中葉以降、佐渡市小泊に佐渡島内の須恵器生産地が集約されるまで操業された。8世紀前半における須恵器生産開始の背景には、律令制下における、手工業生産体制の整備等の事情が考えられ、二見半島の須恵器生産終了後も10世紀まで相川地区の海岸沿いで続く製塩遺跡は、その流れの中で考えられる。[坂井1990 坂井他1991]



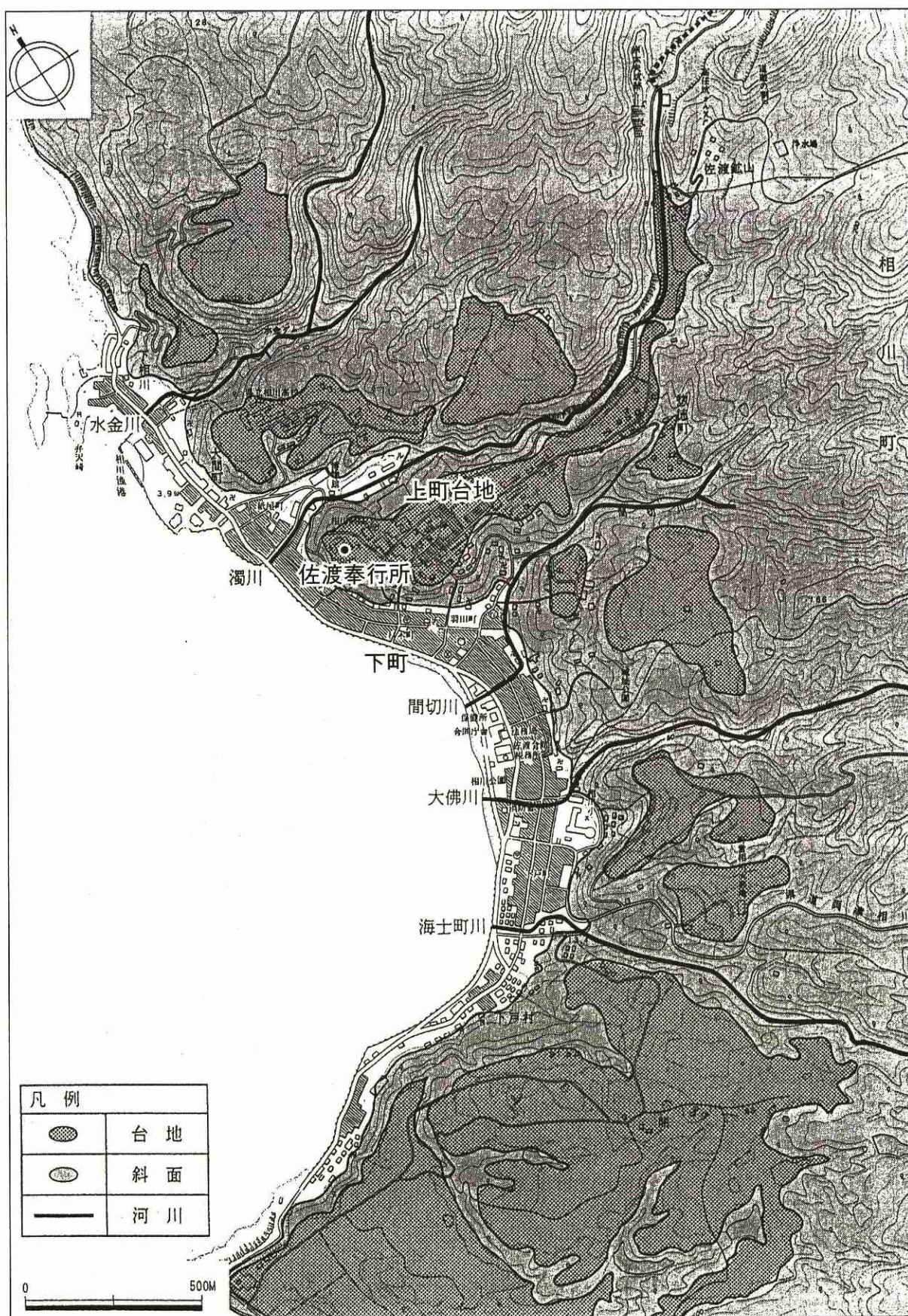


番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	泊川	不詳	14	馬場	奈良・平安	27	谷地2号墳	古墳	40	橘古墳	古墳
2	岩屋口岩屋山洞窟	縄文～古墳	15	藻浦岬	古墳	28	谷地3号墳	古墳	41	宮の浦古墳	古墳
3	禿の高	縄文～平安	16	北片辺城	中世	29	岩塚古墳	古墳	42	稲鯨古墳	古墳
4	大倉城	中世	17	松島川	縄文	30	岩塚2号古墳	古墳	43	稲鯨城本丸	中世
5	小僧の川	古墳	18	安寿塚	中世	31	大浦城	中世	44	貝の平	平安
6	小田南	古墳	19	大塚	縄文	32	石地河内	奈良	45	須行笠	平安
7	小田城	中世	20	戸地中尾	縄文	33	大浦鉾山	江戸	46	台ヶ鼻古墳	古墳
8	小野見鉾山	江戸	21	大野	縄文	34	浜端洞穴	弥生・古墳	47	二見製塩遺跡群	奈良・平安
9	入川鉾山	江戸	22	中道	縄文	35	夫婦岩洞穴	弥生・古墳	48	二見鉾山跡	江戸
10	立島鉾山	江戸	23	鎌倉どん	中世	36	苗代の腰	奈良	49	高瀬穴窯	奈良
11	北河内熊野内	古墳	24	嘉右エ門畑	縄文	37	伝助畑	平安			
12	北河内城	中世	25	佐渡金山	江戸	38	塔の上	古墳～平安			
13	石花城	中世	26	開	縄文	39	橘城	中世			

第1図 佐渡島 大佐渡地域の地形・遺跡







第2図 相川周辺の地形（相川町教委 1995より転載）



この頃、外海府地区の石花川河口近くで営まれた集落遺跡である馬場遺跡（第1図-14）が、1982（昭和57）年に本格的に調査され、6世紀～9世紀までの土器・須恵器が出土している。この遺跡の調査にかかった部分は、海岸砂丘上の祭祀遺跡と捉えられた。その立地から、港湾機能が想定される。[相川町教委1983]

相川地区では、中世前半の遺跡は判然としない。中世後期になると、海岸沿いにて塩焼きを想起させる地名の他、相川・二見半島には、地面を掘り込んで壁面が真っ赤に焼けている穴が3例ほど知られる。これらは、鉄釜による煎焼が想定され、実際に二見半島の送崎遺跡（第1図-47）では、14世紀の珠洲焼が出土している。[金沢1966 坂井1990 佐藤俊策1994]

現在の集落の背後に聳える海成段丘端には、中世の遺物散布地や城郭の縄張りが確認され、佐渡市北片辺の北片辺城跡（第1図-16）が、1984（昭和59）年に調査されている。北片辺城跡の調査では、柱穴・堀状遺構が検出され、中世の包含層とされる土層から、珠洲・須恵器・瀬戸美濃陶器が出土している。[相川町教委1985]

16世紀には、砂金採取によらない金・銀の採掘が、採掘地に隣接した場所に、鉱山集落を伴って行われるようになり、二見半島「野坂」・相川の山奥「上相川」に集落跡が残る。外海府地区にも、段丘上の地名から、中世の採掘が想起されている。

江戸時代に入ると、相川の鉱山が、莫大な投資を得て採掘されるようになる。二見半島や外海府地区でも、沢沿いで、坑道掘りによる小規模な採掘は常に行われ（第1図-8・9・10・33・48）、採石業・製炭業とともに、相川金銀山の補助的な役割を果たした。[小菅1966]

相川では、佐渡市下相川に、江戸時代初め石工専門の集落ができた。下相川の一帯には、吹上（球顆状流紋岩）、水金沢（凝灰角礫岩）、大沢（安山岩、安山岩質凝灰岩）等の石材産地があった。外海府方面、二見方面では佐渡市関の寒戸（石英安山岩）、片辺鹿野浦海岸（礫岩）、佐渡市戸地南海岸（溶結凝灰岩）、佐渡市小川北海岸（凝灰岩）、佐渡市相川鹿伏の春日崎（凝灰角礫岩）等がある。この中で、片辺鹿野浦海岸の礫岩は、鉱山臼の下臼に使用された。その石切丁場開発は、江戸時代の初め頃である。また、下相川字吹上の球顆状流紋岩は、鉱山臼の上臼に使用された（第1図）。[相川町史編集委員会1973]

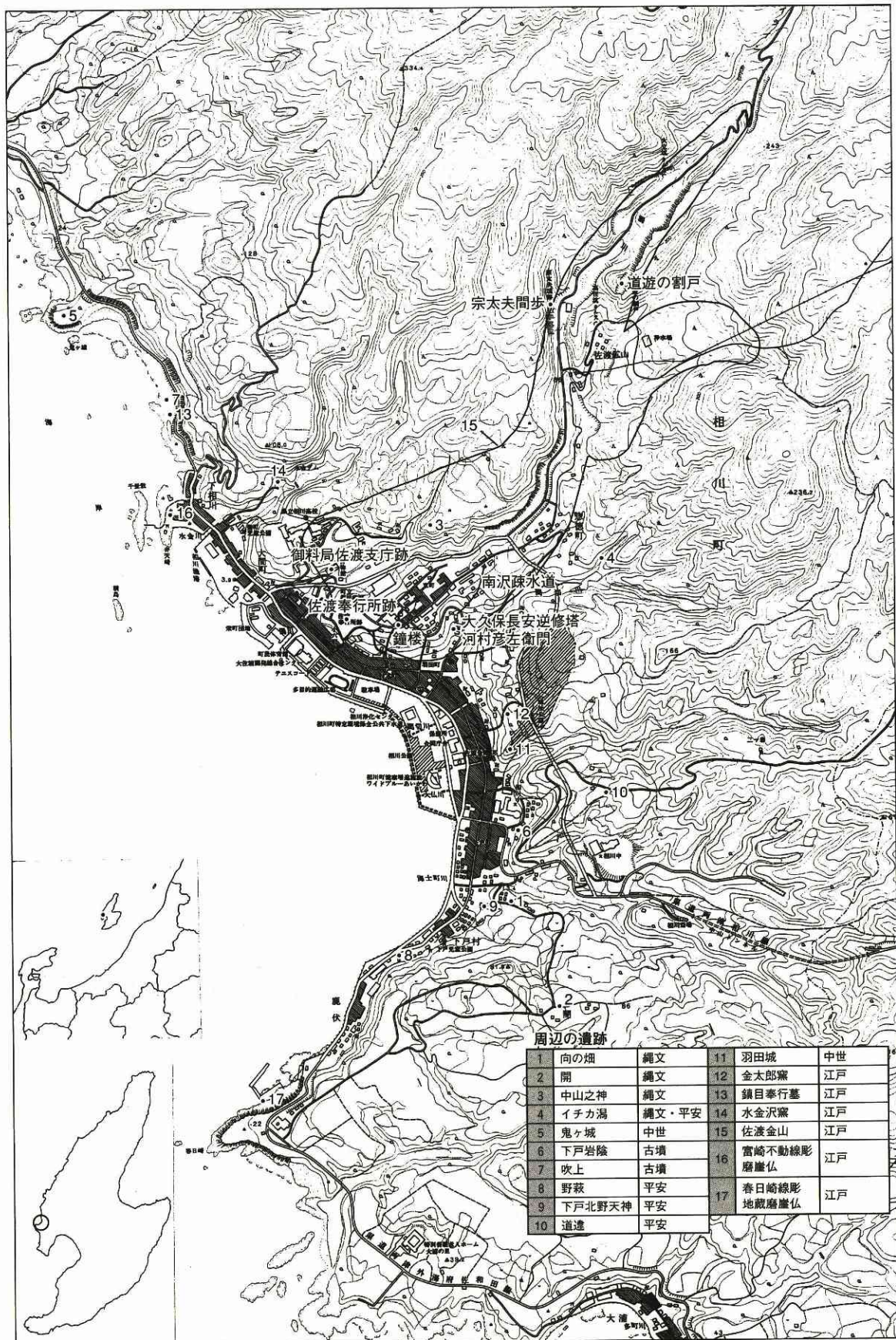
### C 相川周辺の遺跡（第3図）

相川とその周辺には、縄文時代～江戸時代の遺跡が見られる。海成段丘上には、縄文時代・奈良平安時代・中世の遺跡がある。吹上遺跡（第3図-7）のような海岸のすぐ近くにある遺跡からは、製塩土器が出土する。相川の下町地区は、17世紀初頭から18世紀初頭にかけての埋め立てによって造成された部分が多いことから、中世以前には、海浜と低湿地が広がっていたと思われる。

下町地区での土木工事・建設工事の際に発見された下戸岩陰遺跡（古墳）（第3図-6）、佐渡市相川塩屋町の赤化した海浜層（塩焼きの跡か）[佐藤俊策1994]は、当時の海岸線に沿って立地していたものである。このことから、中世以前の人々は、海成段丘上のわずかな平坦地で主に耕作・居住し、段丘崖の手前まで迫る海を利用して生活していた様子がわかる。

### D 相川の成立・展開（第1・3・4・5・6図）

佐渡島の中世における支配者は、本間氏である。本間氏は大仏北条氏の家臣であり、承久の乱後に地頭代として佐渡に入国し、土着の支配階層を温存しながら配下に治め、開発に伴って徐々に増加する所領を庶子に分け与えながら分立し、越後の上杉氏の佐渡攻略による敗北まで実質的に佐渡を支配した、とのイメージが定着している。[田中聡2000]



第3図 相川周辺の遺跡



時代は下るが、室町時代後期の佐渡における一般的な農村支配形態は、穀倉地帯を押さえた強大な力をもった地頭（代）のもとに、各村々にはその代官である村殿（在地名主）がおり、村殿はさらにその下に「垣の内」民の代表者である殿原（二次的な名主）を把握して、段階的に年貢収取に当たるといった構造をもっていたことが、明らかにされている。[山本1966]

鶴子銀山（第1図）で、1542（天文11）年頃に鉱石の採掘が始まると、貴金属の生産量が飛躍的に増加すると同時に、採掘地の近隣に採掘・精錬の固定的な拠点が必要になり、鉱山集落が出現するようになった。[小菅1995] こうして生まれた鉱山集落を地名からうかがうと、採掘現場と集落の境界付近に「代官屋敷」「出居の内」などの地名が認められ、「出居の内」は低い土塁に囲まれて他と区別されている。また付近からは土器・鉱滓が出土する。このことから、支配者が採掘を直接支配する代官の館や鍛冶の施設がおかれていたことがわかる。

その頃、この鉱山集落の下流に当たる地域の沢根・五十里（現在の佐渡市沢根町付近）では、それぞれの村殿が、海岸沿いから背後の海成段丘上に、居館を移すようになる。また沢根・五十里を領有していた河原田本間氏も、それまでの居館を背後の山に移して、海岸の砂州上に城下町として河原田町（現在の佐渡市河原田本町・河原田諏訪町付近）の町割を行ったのは、1560（永禄3）年である。河原田町の領主である河原田本間氏は、1589（天正17）年上杉景勝の佐渡攻略によって滅ぼされるが、河原田・沢根・五十里は存続した。（第1図） [田中圭一1993]

戦国期の鉱石採掘は、初め、山頂の地表部に近い富鉱帯の鉱石を、露天掘り式に掘り進むか、地表部の鉱脈を、溝状に掘削したものと考えられる。岩盤の中に穴を掘って掘り進む坑道掘りの始原について、記録はないが、露天掘りや溝掘りで地表に近い鉱石を掘り尽くす段階で、自然発生的に始まったものと思われる、16世紀の半ば頃に、坑道掘りと灰吹法による銀生産が、全国的に普及したと考える研究者もいる。[小菅1995]

佐渡島内で、坑道掘りと灰吹法による採掘が行われるようになった時期については前述のとおりだが、鶴子銀山の奥山に位置し、岩質の硬い相川金銀山の再開発が、前記の2つの技術の組み合わせによって初めて可能になったのは想像に難くない。

現在の相川に当たる地域では、16世紀の末に「金山町」が1601（慶長6）年の六十枚間歩・道遊・父（てて）の割戸の開発を予測して行政的に独立している。[佐藤利夫1993] この鉱山集落は、江戸時代の資料では、「上相川」と呼ばれている地区である。立地上、相川湾から物資を出入りさせた方が、効率が良いように見える。事実、佐渡市下相川の戸川山本興寺は、1506（永正3）年あるいは1572（元亀3）年の開山と伝えられる[佐藤利夫1993]。しかし、主に、この鉱山集落（上相川）への物資の出入りは、上相川番所・六十枚番所をへて峠越えで沢根・五十里にて行われていたようである。

上相川と呼ばれる地区以外にも、鉱山町は広がっていた。例えば、1600年頃には、左沢の鉱床の開発拠点として、「間ノ山」（現在の史跡佐渡金山第3駐車場）に鉱山集落があった[真島1993]。

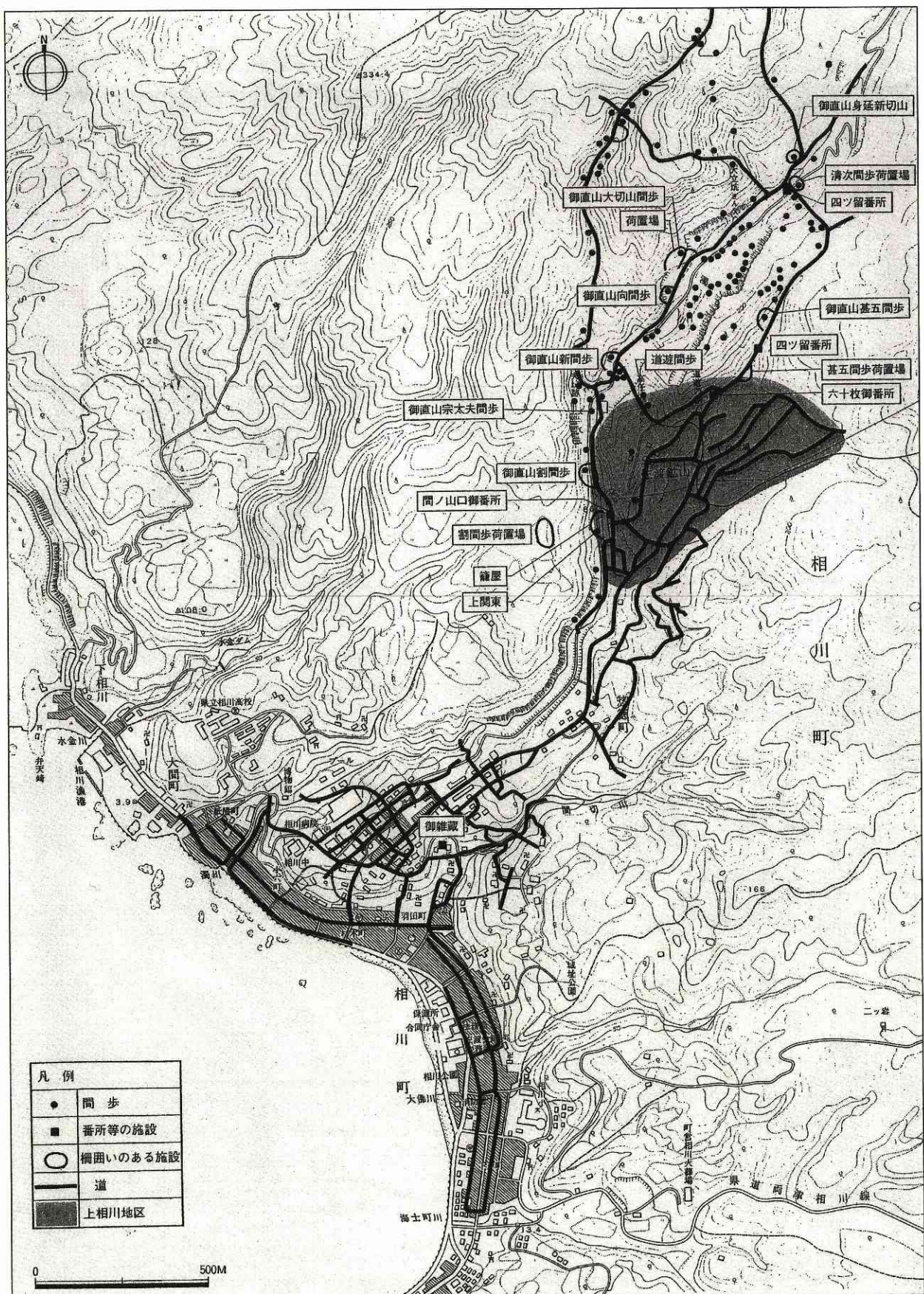
また1603（慶長8）年以前には、関原宗清という山師が、後に佐渡奉行所が置かれる上町台地先端部を、所有していたことがわかっている。[相川町史編集委員会1978]

1600（慶長5）年、佐渡の代官となった田中清六は、五十里地内に館を構えて、沢根の商人と利害対立する形で五十里に港湾施設を整え、物資の輸送に力を入れる。

田中清六は、専ら鉱石の採掘・精錬を行う上相川への物資輸送では、隔地間の価格差を利用して莫大な利益をあげたとされる。

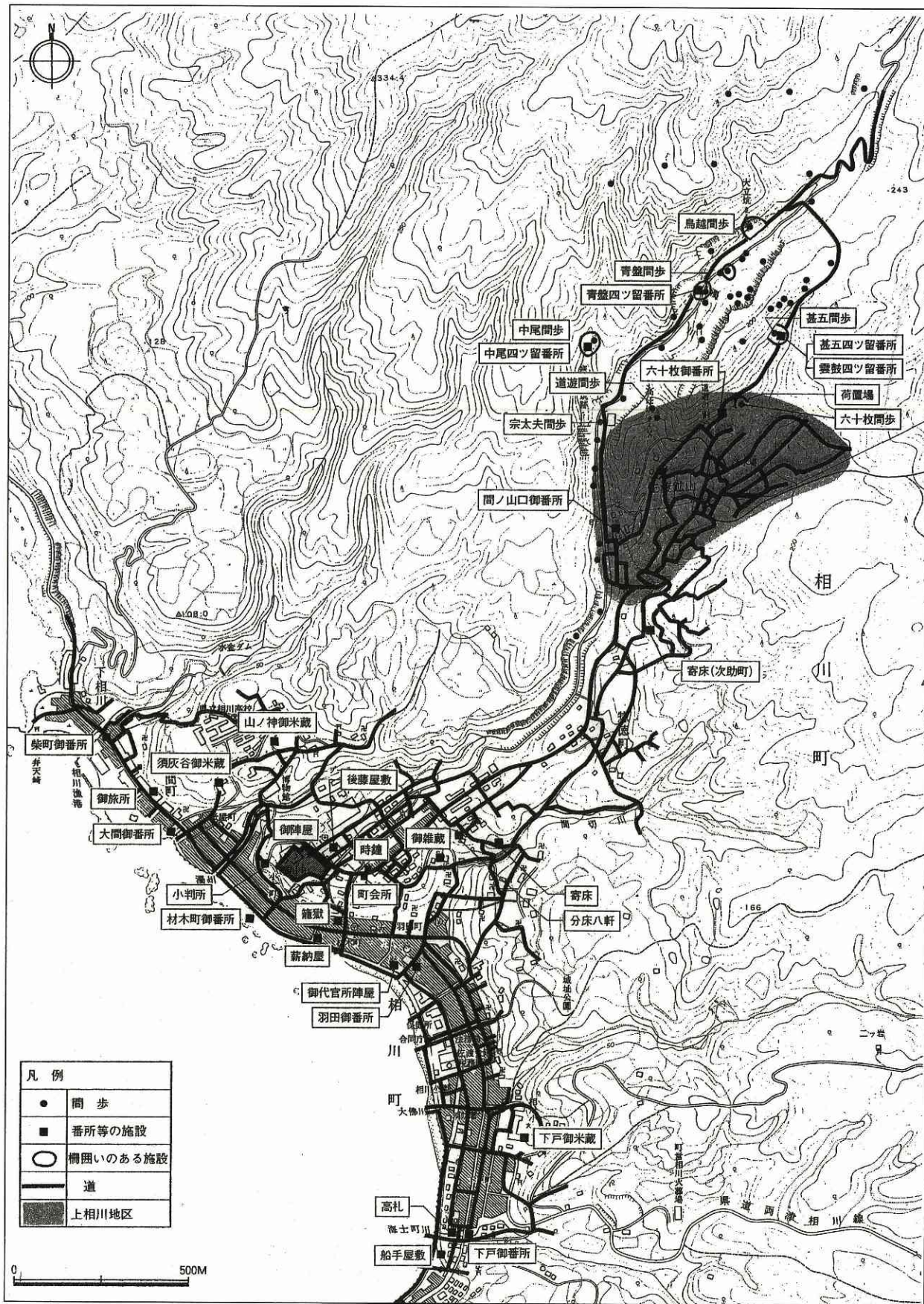
しかし、急速に増大する鉱山町人口に物資の供給が追いつかず、また運上入札制のもと、野放図な鉱石





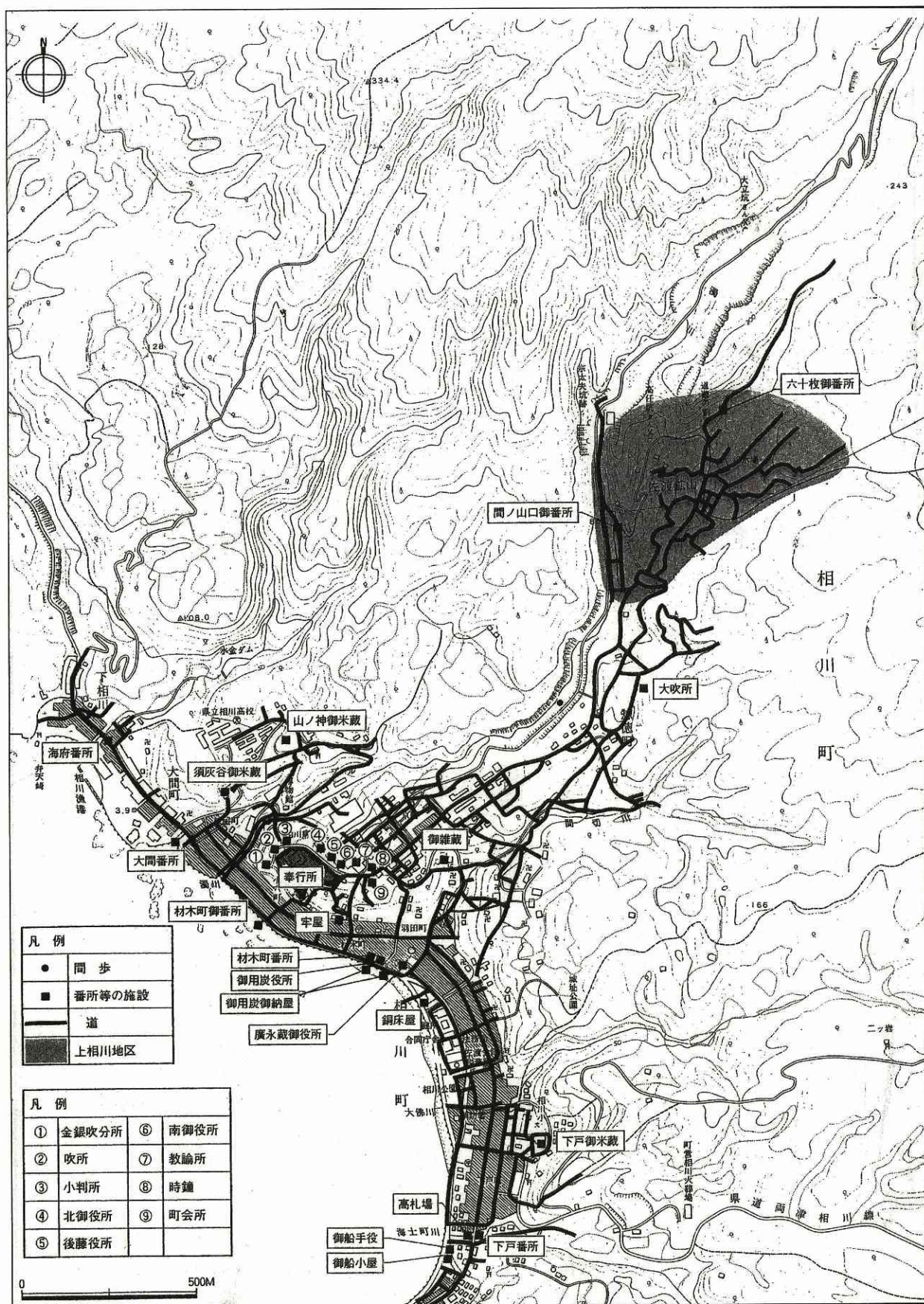
第4図 相川近世遺構分布図（1694年）（相川町教委 1994より転載）





第5図 相川近世遺構分布図（1753年）（相川町教委 1994より転載）





第6図 相川近世遺構分布図（1826年）（相川町教委 1994より転載）

採掘がもたらす鉱山の荒廃が表面化して、田中清六は更迭され、1603（慶長8）年、大久保長安が佐渡の代官となった。

このときの大久保長安らにとっての急務は、谷底から排水坑を多く掘って水没した坑道を再興すること、不足物資を他国から供給して物価を安定させることであった。そこで、それまで鶴子にあった代官所（のちに「佐渡奉行所」と呼ばれる機関）を、相川湾を見下ろす上町台地先端に移し、翌年に完成してから佐渡へ渡り、金銀山の検分をし、具体的な都市計画を指揮した。

都市計画の骨子は、鉱山から上町台地の尾根伝いに道路をつけて、鉱山－佐渡奉行所（当時は陣屋と呼ばれた）－相川湾の港を結び付け、相川湾の港には荷揚げ場を設けて、それぞれに番所を置き、取扱い商品別に商人を集住させて座を組織させ物資を集めさせ、沢根・五十里に港湾機能を依存しないようにするというものであった。物資が潤沢に供給できるようになると、専売の特権は意義が薄れて、取扱い商品別の集住は崩れていく〔田中圭一1993〕が、現在も、相川には商品名のついた町名が残る。

相川成立以前からあった鉱山集落は、その後も鉱石採掘の拠点として存続した（第4・5・6図）。

1620年代からは、代官頭としての性格を帯びた人物が相川に滞在して、地方代官が佐渡島内各地の代官所に赴任する、というやり方を改めて、佐渡島内各所の代官を相川の佐渡奉行所に呼び戻し、河原田・小木・赤泊・夷などの代官所をなくしていった。代官所に替わって、他国移入の物資や人々の往来を支配統制し、関税徴収事務を行う「番所」の機能を充実させていく。〔相川町史編纂委員会1978〕

こうして、相川の機能は鉱山町としてよりも、佐渡一国支配のための府としての意味が強まる。そして一町目から四町目までの埋め立て（1629年）から市町の形成（1710年代）に至るまで町屋が広がり、下町地区が発展していく（第4・5・6図）。〔佐藤利夫1993〕

## E 近・現代の相川

1868（明治元）年、新政府は佐渡県を置き、1869（明治2）年に越後府の直轄となり、1871（明治4）年には佐渡県が相川県に改められた。その後、1876（明治9）年に、新潟県に合併され、新潟県佐渡支庁の直轄となった。これにともない、佐渡奉行所跡は佐渡郡役所として使用され、1942（昭和17）年の焼失まで、行政の中心地としての役割を果たしていた。

江戸時代に繁栄していた「上相川」周辺の集落は、鉱山の近代化技術導入とともに衰退し、現在は佐渡市相川大工町から佐渡市相川京町にかけて、当時の町割を残している。

「明治八年八月相川諸方地理乃図」と「大正十四年九月相川市街図」を比較すると、後者には佐渡郡役所敷地内に相川中学校が建設されており、隣地には警察署、裁判所、鉱山病院が記されている。海岸部は板町と材木町と新材木町が材木町に、上羽田町と下羽田町が羽田町に統合されるなど町名変更がみられるものの、町割に大きな改変はみられない。佐渡市沢根へ通じていた中山道は、旧道の両側の山を開鑿して1885（明治18）年に中山新道が完成し、1924（大正13）年には中山隧道が落成した。

したがって現在の海岸線を通る主要地方道両津・鷺崎・佐和田線ができるまでは、金銀山から海沿いにかけて、江戸時代の町割りがあるまま残っていたと考えられる。

明治時代以後、佐渡近鉱山の近代化にともなう大立・高任・間の山・北沢・大間といった主要地区の開発や、これらを結ぶ軌道の敷設などにより、濁川沿いの景観は激変する。特に、1891（明治24）年の大間港の完工、1937（昭和12）年の北沢浮選鉱場完成は、大規模な開発であり、現在も巨大な遺構が残されている。

1952（昭和27）年、佐渡鉱山が、所有資産及び資金援助（相川町に対して）と引き換えに、企業合理化を実施し、鉱山従業員とその家族合わせて2000人余りが町を去った。鉱山が大縮小する前の相川町人口は、



8324人であった。他に鉱山への出入り業者、鉱山から納付される税金収入等を合わせるといかに、当時、鉱山が相川町に与えていた影響が大きかったかがわかる。その後、相川は、鉱山以外の産業に将来展望を託すことになる。[相川町史編纂委員会1995]

戦後の、自動車社会への転換にともなう交通量の増加から、1965（昭和40）年に現在の主要地方道両津・鷺崎・佐和田線が完成し、旧来の砂浜は姿を消した。さらに、1976（昭和51）年より、この県道から海岸側部分の埋立て工事が始まり、町民体育館や多目的運動広場などの主要施設が建設された。

大間港では1963（昭和38）年からはじまった漁港整備事業にともない、1967（昭和42）年に大間港に隣接して相川漁港が完成した。

1978（昭和53）年頃までは、大間港と二見港の2港で鉱石の積込を行っていたが、その後、二見港に一本化され、大間港は鉱山施設としての役目を終えた。

また、中山新道は、1987（昭和62）年に、旧中山道を挟んだ西側に建設された中山トンネルに切り替えられ、現在の主要地方道相川・佐和田線となる。

1989（平成元）年には、細々と最後まで続けていた鉱石採掘作業を中断し、鉱山は休山状態に入り、400年近い鉱山の槌音が消えた。

2001（平成13）年には、相川市街地の通過交通の過密を緩和するため、県道白雲台・乙和池・相川線へ至るバイパス道が完成した。[相川町2004]

今、鉱山の休山・資源の国中平野集中を受け、相川地区からの人口流出は、ますます激しくなっている。緩やかでも着実に進んできた衰退の波は、ついに止まることはなかった。[金井透 1993]

鉱山の機械化・規模縮小・休山、国・県行政機関の縮小、土木関連予算削減、佐渡市発足に伴う行政職員の流出、観光業の不振と、相川は次々とその基盤を失いつつある。インフラとしての相川は、そして、ここに住む人たちがふるさととして特別な思い入れを抱く対象としての相川はこれからどうなってゆくのだろうか。

## F 石材と産地（第1・7図）

主な石材の産地としては、佐渡市小泊（石英安山岩）、佐渡市椿尾（花崗岩）があげられる。（第7図）相川の古い墓及び石造物は、ほとんどこの二つの石材で造られている。小泊と椿尾は、江戸時代の佐渡における代表的な石材産地であった。

相川では、佐渡市下相川に、江戸時代のはじめ石工專業の集落ができたこともあって、下相川一帯にかなりの産地がある。吹上（球顆状流紋岩）、水金沢（凝灰角礫岩）、大沢（安山岩、安山岩質凝灰岩）に大別できる。ここから採石した石材でつくられた墓、石造物も多く見られる。（第1図）

外海府方面、二見方面の石材産地としては、佐渡市関の寒戸（石英安山岩）、片辺鹿野浦海岸（礫岩）、佐渡市戸地南海岸（熔結凝灰岩）、佐渡市小川北海岸（凝灰岩）、佐渡市相川鹿伏の春日崎（凝灰角礫岩）等があり、これらはその土地の墓の石材として用いられている。この中で片辺鹿野浦海岸の礫岩は、鉱山の鉱石粉碎用石磨材として多量に使われて、その石切丁場開発は江戸時代のはじめごろまでにさかのぼる。（第1図）

なおほかにも、各村落にわたって、小規模な石材採取の跡が見られるが、最近では島外からの花崗岩（みかげ石）の大量移入のため、ほとんど採取されていない。しかし、石垣石の採取は各地で行われている。

ところで、古くは島外から運ばれた石材の記録があるが、現在までの調査では、佐渡市岩谷口の船登源右エ門一族の墓等が、越前（福井県）から運ばれた笏谷石（凝灰岩）ではないかとみられている。また佐

渡市松ヶ崎の本行寺境内にある延宝期の石灯籠は、明らかに佐渡産出の花崗岩と異なり島外から運ばれた形跡が見られる。[相川町史編集委員会1973に加筆]

石材の特色は以下のとおりである。

#### 小泊石（石英安山岩）（第7図）

造岩鉱物として石英、斜長石がおもに見られる。わずかに角閃石の見えるものもある。中色の岩石であるが、風化したものは淡褐色である。比較的堅硬で細工には手間がかかる。したがって風化しにくい。古い五輪塔、板石形石塔、手洗い鉢に多く使用されている。石材としての使用は椿尾石の切り出しよりも先がけていて、室町以前にもこの石材を用いた墓も少なくない。

#### 椿尾石（第7図）

俗に「佐渡みかけ」といわれる石材で、造岩鉱物は石英、長石、角閃石等がおもに見られる。一般的な花崗岩に比べ、石英分が少なく（花崗岩としてもっとも必要な石英分20%以上、の条件には疑問もあるが）、比較的粗粒で軟質、風化ははげしく、ゴマ塩様に見える中色、または優白質に近い岩石である。細工は小泊石よりも容易で、五輪塔はじめ各種の石造物特に地蔵等多方面に使用され、その細工は小泊石とともに全島に分布し、相川でも石造物の主流を占めている。

#### 吹上石（球顆状流紋岩）（第1図）

造岩鉱物は石英、長石等がおもに見える。多数の球顆を含む流紋岩である。球顆は一種または二種以上の繊維状鉱物が放射状または、同心円状に集合したもので球顆の間には緻密な隠微晶質の石基がある。美しい菊花状集合体のものもあり、淡桃色、淡褐色、緑色、または、それらが混じりあっているものがある。硬くて風化はしがたく、しみ割れ等も生じにくく、採石の場合切り出し作業も難しい。したがって、細工は困難であるが鉱山の鉱石粉磨用に使用するほか石垣、まれに墓、手洗い鉢用の石材として見られる。

#### 水金沢石（凝灰角礫岩）（第1図）

鉱山付近の水金沢をはじめ相川では広く分布している岩石で葉層状凝灰角礫岩、凝灰質頁岩、および細粒凝灰岩も少しは見られるが、これらの分布は限られる。石材として採取されているのは凝灰角礫岩がほとんどである。淡緑色、灰緑色のものが多い。凝灰角礫岩の礫は細、中礫の亜角礫状のものが多く灰緑色、赤褐色、青黒色の安山岩、流紋岩、黒色頁岩等である。比較的軟らかで、風化しやすく、しみ割れも生じやすい。採石の場合、切り出しも容易である。したがって細工は容易であるが風化しやすいので、もとの形をとどめているものが少ない。墓、流し石、水車小屋の石うす、火消し等の石材として使用されている。

#### 大沢石（安山岩、安山岩質凝灰岩）（第1図）

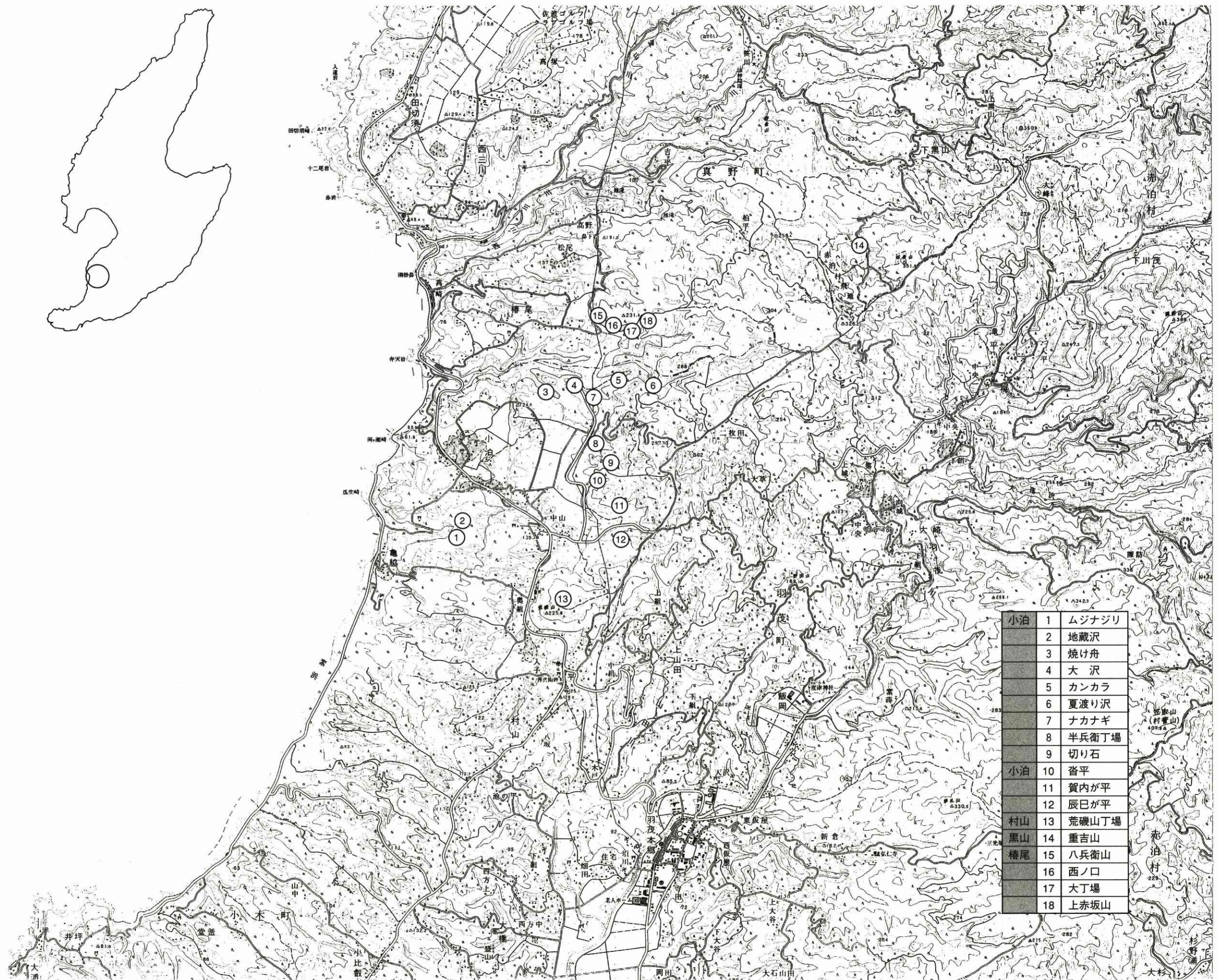
灰黒色で流紋岩、黒色頁岩等の破片をともなっている安山岩、あるいは安山岩質凝灰岩で、硬さも普通の比較的均質な岩石である。風化もそれほどはげしくなく、しみ割れ等も少ない。したがって切り出し作業、細工も容易なので墓、石垣石、手洗鉢、鳥居、等の石材として昭和のはじめころまでかなり使用されている。

#### 片辺礫岩（礫岩）（第1図）

片辺から鹿野浦に至る海岸には、花崗岩礫を多量に含む礫岩が分布している。この特殊な礫岩を片辺礫岩とよび、片辺南海岸より鹿野浦に分布する塊状、無層理のものと、平根崎、戸中付近に分布する層理が発達し、砂岩、珪質細粒凝灰岩と互層するものがある。石材として切り出されたものは前者で、分布が海岸沿いに限られ、花崗礫岩がほぼ80～90%を占める礫岩で、基質は灰緑岩、帯黄緑色で、ときに暗緑色を呈する花崗岩の破片および安山岩質凝灰岩である。まれに30cm程度の砂岩をはさんでいる。全体として非常に硬く、柱状節理がほぼ垂直に発達して、断崖をつくり、遠望すると火成岩体のような産状を示している。

細工は比較的容易ではない、用途は前述のように鉱山の鉱石粉磨用石磨材として多量に使われて、その石切丁場は、海岸沿いの断崖、波打ち際等に美しいノミ跡を残している。[相川町史編集委員会1973]





第7図 小泊・椿尾石材産地分布図（藤井三好 1998をもとに作図）







## 2. 石造物の生産と流通

### いつ頃から作られたか

佐渡の石仏がいつ頃、どうして作られるようになっていったか。それを物語るのに二つの口碑が伝わっている。

その一つは、佐渡の石工の起源は新羅王が伝来したということ。

その二は、平家の落人、弥兵衛宗清の末裔が、故あって当国へ来て始めた。

というものである。

上のうち、その一は何の根拠もなさそうである。その二は、小泊の石屋の起原伝説であって、平氏の重盛の子、宗清は、平家の没落ののち、三河国岡崎に隠れ、また伊賀上野にも居り、その子の権三郎は佐渡の小泊の海岸から上がり、下河内に居てそののちに現在の屋敷へ引き移って石細工に妙を得た（『西三河村志』）としている。三河国岡崎は石屋の産地である。小泊は岡崎の姓が多い。これらのことは、小泊の石屋の起原をひもどく一つの鍵であるようにも思える。

右の口碑のほか、記録にあらわれるのは、『佐渡相川志』、『佐渡年代記』などがあげられる。

『佐渡相川志』巻三の「石工（いしきり）」に、

慶長年中ニ越中ヨリ五郎兵衛ト伝フ石工来リテ此業ヲ勤ム。陣屋或ハ味方孫太夫屋敷木原正順等ガ石垣ヲ築ク。其外諸方ノ石細工ヲナセシヨリ弟子多ク付キテ次第ニ広ガルトゾ今ニ一町此業ヲ勤ム。石切町下相川ニアリ。とあり、

『佐渡年代記』巻之六、天和三壬戌年（一六八二）の項には、

一、八月十六日下相川村石屋作兵衛又右衛門坏云者共勝場入用ノ磨下丁場出入訴出ルニ付取糺ス所慶長年中銀山立始リノ砌播州見影ヨリ石切四兵衛源右衛門ト言者来リ見影ヨリ石ヲ廻シ磨石ニ用ヒ亦越後国山ノ下黒岩歌村ヨリモ取寄せシガ……。としている。

この二つの記録は、相川の石切町の起こりを記したもので、慶長年中、相川金銀山が立ち始めると、越中から、「五郎兵衛」が、播州見影からは「石切四兵衛源右衛門」が来たことを示している。ただここで注意したいことは、右の『佐渡年代記』にみえる記録の中には数名の石工の名が出てくるが、その中で、同じ下相川の石切町のことであるのに、『佐渡相川志』の「五郎兵衛」の名はどこにも出てこない。これはなぜなのであろうか。

次に島内にみられる石仏等の資料から、その古さをさぐってみよう。確かに江戸時代以前と思われるものはいくつかみられる。例えば、

小木町宿根木岩屋磨崖仏

相川町橘杉島聖観音磨崖仏

相川下相川富崎不動磨崖仏

などで、宿根木の磨崖仏は藤原後期説や室町初期説のあるところだし、杉島聖観音磨崖仏は藤原初期説など、富崎不動磨崖仏は桃山期説などである。また慶長年代の石塔などとしては、小木町蓮華峰寺にある大五輪塔と鳥居があり、相川町大安寺には同じく河村彦左衛門の大五輪塔や、大久保石見守長安の逆修塔などがある。このうち蓮華峰寺の五輪塔、大安寺の五輪塔には、小泊村（または「木泊村」）の名が数名刻まれている。このことは、小泊村および、その付近にはあきらかに、慶長年代には石工がいたことをあらわしている。

恐らく、上代から中世にかけては、大体は島外からの修業僧や普教僧などによって海岸などに磨崖仏やその他の石仏がきざまれた場合が多かったであろう。一方中世も終わり頃から、小泊などで、そろそろ石

工たちが定着していった。佐渡の古い寺院や村落などにはその当時の石仏や石塔などがみられるが、それらは小泊あたりの石工たちによって製作されたのであろう。徳川期に入ると、一方では相川金銀山の開発と平行して、相川に主として金銀山で必要とした石臼などや石塔などがぎざまれる石工の町が作られていった。

### どこで製作されたか

佐渡の石仏の産地はどこかという問題である。それは前項で記した、いつ頃から作られるようになったか、ということも関連することである。

普通、佐渡の石仏の産地としてあげられるのは「小泊」（佐渡市小泊）と「椿尾」（佐渡市椿尾）である。そのことは、『佐渡四民風俗』と『佐渡志』にすでに当時（江戸時代）のことが記されている。

『佐渡四民風俗』の上巻には、

一、小泊村、椿尾村は耕作の外石臼、石仏の類を多くきり出して渡世の便に仕り候・・・。

とあり、『佐渡志』巻之四「諸物」には、

…小泊椿尾両村の石工は国用の余り近国に及び殊に石仏を作ることに巧にして北陸七州と羽州の海浜村里迄も彼像至らざる所無し・・・。

としている。これによると、相当に輸出もしていたことが知られる。

右のうち小泊においては、前項でもみたとおりであるが、椿尾はどうであろうか。

「椿尾」は「小泊」の隣村あるが、いつ頃から石仏などを作るようになったかはわからない。恐らく、小泊よりは古くはないであろう。そこで問題となるのは、やはり、前記した『佐渡相川志』の「五郎兵衛」で、椿尾の名工である「五兵衛」の本名は「五郎兵衛」といい、その両者に何か連なりがあるのであろうか。

小泊や椿尾に石工が居住を定めたのは第一に、まずそこに石材に適した石山があることであった。小泊には、「大沢」「なつわたり沢」「地蔵沢」などの石山があり、「おうちょう場」がある。それらの石山の石質は大体角閃安山岩であって、白っぽくなく比較的落ち着いた石感をもっている。この石はまた普通に「ごま石」とも言っている。なお、小泊では石仏にきる石は、石山によって違い、「地蔵沢」の石を石仏に用いた。椿尾では「おうちょう場」の石を石仏にも石材にも用いたという。また石仏石を呼ぶ場合に、小泊、椿尾の石工たちは「シャク」（細工石）と呼んだといい、このことから『佐渡相川志』の「五郎兵衛」の「諸方ノ石細工ヲナセシ」という「石細工」の内容がうかがえる。

一方「下相川村石切町」（佐渡市下相川）は、慶長年間に立ち始まっていたことが知れたが、石仏の類はあまり作らなかったようである。いま、その石山についてみると、当初は石材を輸入していたが、南沢、へつつり山、ニッ岩、春日崎などの石が使用された。また片辺、戸中などからも運んでいた。それらは大体、石臼、墓石、土台石などに用いられていた。

以上のとおり島内の石屋は、小泊、椿尾、下相川が、最も多かった。[計良勝範1968]

そして、小泊、椿尾の石工は石仏、狛犬、墓石など信仰関連の細かい加工を施したものや、粉挽臼を主に生産し、佐渡島外へも移出していた。

下相川の石工は、間知石、土台石、餅つき臼などの建築部材・生活用品あるいは、鉾山臼を主に生産した。下相川の石工達が製作した品物は、主に相川で使用された。

江戸時代の中ごろになると、小泊の石工が国中平野に進出していき、石工の工場や石切丁場が広がってゆく。[北村 他1986]

天保年間の記録と思われる「年中入用覚張」（羽茂町上山田、中川勇雄氏蔵、中川善兵衛が佐渡一国一



撰をやるときの資料としたものといわれる) に、

小泊村石工鑑札拾七枚

下相川村石大工拾貳人

山田村石工四人

徳和村石工四人

村山村石工役四貫文

などとみえる。右の他、一人、二人位ずつ全島二十二カ村に石工が記されている。(この文書では、椿尾村の石工が記されていない。) [計良勝範1968]

これらの小規模な石材産地や石工達は、近隣の集落の需要を満たしていた。